資料館ノート　第 122 号　　平成 29 年7月 16 日発行

時代小説と江戸・深川②

江戸時代の出版と小説

江東区深川江戸資料館

現在の私たちは、過去の出来事や説話を題材にした（取り上げた）歴史小説や時代小説をはじめとした書籍を、書店などで本を購入したり図書館で借りたりして読むことができます。こうした、書籍を読む・楽しむことができるようになったのは江戸時代からであると言われています。本号では、江戸時代の出版の概要と書物について紹介します。

1. 江戸時代の出版

出版業が発達し、印刷物が商品として流通するようになったことは江戸時代の文化の特色といえます。

徳川家康が江戸に幕府を開き、幕府は文教政策の柱として出版を奨励しました。それ以前の出版物は、仏教・医学・哲学書など一部の知識階級を対象に発行された書籍に限られており、個人的な興味による読み物は、持っている人に借りるか自分で筆写しなければなりませんでした。

(1) 印刷技術の発達

日本における印刷技術の歴史は、奈良時代の百万塔陀羅尼（だらに）を始めとして、世界史上でも古い歴史をもっています。平安・鎌倉・室町の各時代にも書物の印刷は行われていました。元々、中世の頃の出版は、臨済宗の五山が中心で、多くが大寺院の工房で行われてきたため、その大部分は仏教書でした。

江戸時代初期には、それまでの木版による製版印刷に代わり、活字（金属や木に文字を彫り込み判子状にしたもの）を使った印刷が行われ始めました。

活字印刷は、活字を組み直せばまた別の版をつくることができ、小規模な印刷には利点がありましたが、寛永年間（1624 ～ 1644）頃になると、学問の普及などに伴い読者層が広まり、出版業も興っていきました。活字による印刷では、急増する書物の需要には間に合わず、終焉を迎えます。

江戸時代の印刷の主流は、製版印刷でした。それは、紙に墨で文字や絵を記し、その紙の表面を板木側に向けて貼りつけ、墨の部分を凸形に彫り残し、その部分に墨をのせ、紙をあててバレンで摺り、写し取る、という方法です。1 枚の板木をつくるためには、作者、筆工（耕）、彫師、摺師などがいて 1 枚の印刷物ができあがります。下図は、摺師の様子です。これは、板木があれば同じものを繰り返し摺ることができます。このことにより印刷技術が発達し、幅広いジャンルの版本が製作され、識字率の上昇にともない、広く庶民にまで出版物が普及していったのです。

(2) 江戸の本屋

江戸時代に出版業が登場し、多くの書物が売り出され、読者も増加の一途をたどります。しかし、書物は高価なので、普通の庶民はなかなか買うことができませんでした。そこで、貸本屋という生業が成立します。貸本屋は、店を構えるだけでなく、本をかついで得意先をまわったといいます。

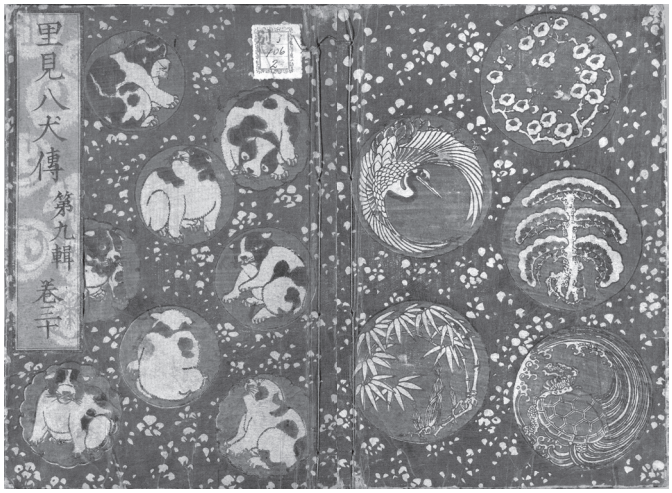
その実態は、文化 5 年（1808）の記録によると、地域ごとに組を作っており、日本橋南組や神田組など合わせて 12 組、合計 656 人でした。その内、本所・深川は 40 人でした。その後、天保年間（1830 ～ 1844）には江戸の貸本屋は 800 軒と伝えられています。

多く江戸の庶民に親しまれた出版物には、武鑑や

十返舎一九 作・画「的中地本問屋」
享和 2 年（1802）　国立国会図書館蔵

往来物などの実用書や、草双紙（赤本、青本、黒本、黄表紙、合巻）や洒落本、滑稽本などの文学書などがありました。とりわけ、草双紙や滑稽本、読本などは総称して戯作と呼ばれ、江戸時代を代表する小説の一つです。

また、江戸時代の出版物は実に多彩でした。現在、私たちが書店で目にするほとんどのジャンルの本が存在していたといっても過言ではありません。武士や学者、医者といった知識人のみならず、ごく一般の人びとも身近に出版物に触れていたのが江戸時代の特徴でもあります。



曲亭馬琴「南総里見八犬伝」　国立国会図書館蔵

2．江戸時代の小説

江戸時代に出版された書物のベストセラーは、曲亭馬琴「南総里見八犬伝」や十返舎一九「東海道中膝栗毛」、柳亭種彦「偐紫田舎源氏」や為永春水「春色梅児誉美」などがあります。どれもみな長編小説です。その中で、深川とゆかりのある作品を紹介します。

(1) 春色梅児誉美

「春色梅児誉美」は、為永春水によって著された人情本の代表作で天保３年（1832）～同４年（1833）に描かれました。その内容は、鎌倉に仮託した江戸の町を背景に、主人公丹次郎をめぐる４人の女性たちとの恋愛模様を描いたもので、「泣本」とも呼ばれて当時の多くの女性読者を魅了しました。その後、本書の好評を受けて「春色辰巳園」「春色恵の花」「春色英対暖語」など、後世に「梅暦シリーズ」と呼ばれる続編を次々と著したのです。シリーズを通して江戸深川を情緒豊かに描いており、その中には深川の芸者も登場し、深川とゆかりの作品といえます。

(2) 南総里見八犬伝

「南総里見八犬伝」は、曲亭（滝沢）馬琴によって著された読本で文化11年（1814）～天保13年（1842）に描かれました。その大きな特徴は、「水滸伝」など中国や日本の稗史（正史に対して、民間の歴史）などを主題としている点です。その内容は、戦国時代、千葉県南部を活躍の本拠地としていた房総里見氏十代の歴史を題材に、馬琴が創作した長編伝奇小説で、ある程度は史実に即しながらも、正史の上では恵まれずに終わった善良な人物を取り上げて活躍させています。

馬琴は、読んで面白く、その上、ためになる話を書こうと考え、「八犬伝」の内容は、「仁」「義」「礼」「智」「忠」「信」「孝」「悌」の玉を持つ八犬士が善人を助け悪人をくじくという「勧善懲悪」「因果応報」の物語です。発行部数は年間で500部、売値５冊セットで約20匁（現在の約４万円相当）であったと言われています。読本は高価であったため、読者は裕福なインテリ層が多かったそうです。町人などの庶民は貸本屋を介して読んでいました。

なお、馬琴は、明和４年（1767）深川浄心寺門前にあった松平信成邸内（平野１付近）で生まれており、深川とゆかりの深い人物の一人でもあります。

以上みてきたように、現在の私たちが過去の生活の様子や風俗を書籍で知ることができるという社会環境は、一見当たり前のように思えます。ところが、かつての書物の読み手は僧侶や貴族など一部の人びとに限られており、それが江戸時代の町人文化や印刷技術の発展などによって一般民衆にとり身近な存在へと発展していったのです。出版されたものの中にはベストセラーがあり、また本号で紹介した「八犬伝」を始めとする歴史小説・時代小説などの前身になる書物を手に取り、読むという行為は、今の私たちと通じるところがあるのではないでしょうか。

（主な参考文献）

『八犬伝の世界』（館山市立博物館 /2009）
今田洋三『江戸の本屋さん』（平凡社 /2009）
竹内誠 編『江戸文化の見方』（角川文芸出版 /2010）